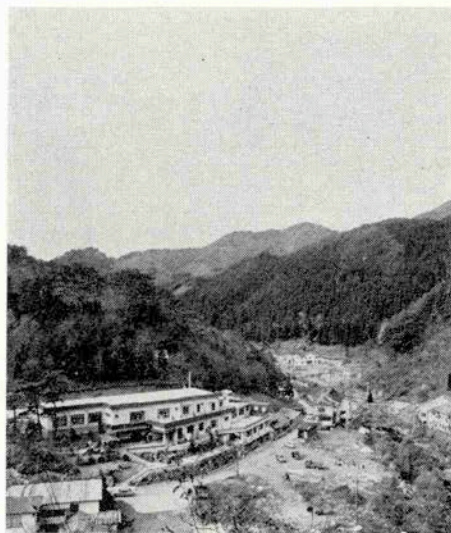


丹波の猪狩り

黒部 亨 〈作家〉

冬の味覚として兵庫県が自慢するものの一つに、通称「ぼたん鍋（猪鍋）」がある。ぼたん鍋といえど丹波。丹波といえど多紀郡篠山町。その篠山から東約九キロに聳える弥十郎ヶ岳（七二五米）一帯が丹波猪の生息地で、その南麓、城東町後川新田の籠坊温泉は、獲りたてのぼたん鍋を食わせてくれる所として知られている。

温泉地とはいえ、人家十数戸、温泉旅館六軒という秘境。取材班は師走にはいつて間もない一日、同地の山勢屋旅館に一泊、鍋をつつきながら地元の猟師たちから猪談義を聴くことになった。



山深い丹波の籠坊温泉

講師は、村総代で飲食店と猟師兼業の山田宗太郎さん（65）、前村長で多紀郡文化財専門委員の目下六三郎さん（72）、そして丹波の猪撃ち名人といわれる津田仁太郎さん（55）の三人。

猪鍋のことをなぜ「ぼたん鍋」というか。日下さんの説明によると「上等の牛肉を桜肉と花にたとえまっしやる。『獅子に牡丹』ということわざから、獅子を猪にかえてぼたんの花を冠したわけです」とのこと、猛々しい猪にしては優雅な美称をちょうだいしたものである。

見るからにいいしそうな材料が運びこまれた。今夜の肉は『メイ』（メスのこと）。オス肉にくらべて柔らかく粘着性がある。白菜、ネギ、椎茸、こんにゃく、豆腐、タケノコ、大根、しゅんぎく、えのきだけ、人参、がんもどき、モチなど、十二種類の具をたっぷりぶちこみ、土鍋に入れてミソだきする。猪肉には独特な臭気があるので、はじめ粉山椒（こなざし）を消し、ミソだきでさらに匂いを消す。柔らかな肉が口の中でとろけるようにおいし

い。一方の大皿に並べられたつき出しは、猪のミンチにタマゴを加え、それを椎茸にのせてバター焼きしたもの、肉を酒蒸しにしてミソのタレをつけ、青紫蘇の葉にくるんだもの。冷えてもあぶらを中和するから味がかわらず、酒のサカナにはうってつけである。

猪肉は強精剤として有名である。山田さんがニヤリと

して

『しし食った報い』ということわざがおまっしゃろ。よい思いをしたあとで困ることが起きるのも当然ちゅう意味ですが、このあたりでは、しし食って元氣の出たあまり、よその女子はんに手エ出して、あとでヨメはんに叱られるちゅう意味に使われてまんね」

獺期は十一月一日から二月十五日までの三カ月半。十二月かに一月ごろのものが味がよく、とくにメス二歳もの（三十貫くらい）がうまい。一頭の猪からとれる肉の量はだいたい体重の六分で、胸の肉がいちばん上等。私たちの食膳にのぼる猪には紀州ものと丹波ものがある。紀州ものは一見して顔が長く、温暖地で育つためアブラがのらないので味が落ちる。それにくらべて丹波も

の顔は短く味がよい。その理由は山や気象条件がきびしく、運動量が多いから身が引き緊まり、加えてエサが豊富だからである。

猪の食物は植物では稲、粟、山いもなど。山のギャングだから村々の農作物は毎年おびただし被害を受ける稲の収穫期には田を踏み荒らし、大物一頭で四斗の稲を食べる。粟などもちゃんと皮をむき、シブを取って食べている。山の中にはいってみると穴だらけになっているところがあるが、これは猪が山いもを掘り取った跡。一米もある長い山いもを鼻で掘り出して食べる。

動物ではミミズ、カニ、マムシを好んで食べる。マムシに噛まれたら猪の鼻をすりつける、というマジナイはそこからきたのだろう。カニをたくさん食った猪はたいてい寄生虫をわかしている。

寄生虫といえば、猪の毛の中にはシラミ、ダニがうじゃうじゃわいている。かゆいため、ぬた場^{ぬたば}にはいつて湿った泥で虫取りをし、木の幹に体をこすりつける。山の中にはいるところどころに立木が半分ほどすり減っているのが発見されるが、これは猪が体をこすりつけた跡である。

猪撃ちについて、津田さんが豊富な体験談を語ってくれた。あんまりおもしろいので、箸や盃を持つひまがない。

現在一般に行なわれているのは「勢子猪^{せしやうぶ}」で、獺師が獺犬が五人から十人、三頭から十頭。まず猪の出没状況、足跡、エサを食った飯場の状態などを総合して、山の見切り^{けんきり}をつける。つまり猪のひそんでいると思われ山を一つ決めて場所をしほっていく。このとき猪の大きさや数を想定し、わがほうの犬の力や人数を計算する。戦力の比較計算には長年の経験とカンがものをいう。これらの仕事はすべて獺頭^{たづなごう}がする。獺頭はチームの実力ナンバーワンがなり、全責任と指揮権を持つ。

山の見切り^{けんきり}がつくと、猪の逃走経路を何ヶ所か想



捕獲された猪三匹（篠山の鳥幸で）



台所でぼたん鍋の準備がととのう

定して、そこに一人ずつ猟師が「待ちを張る」。「待ち場」あるいは「受け場」といい、山すから中腹にかけての谷間を選んで身をひそませる。この場合、猟頭はいちばん猪の出そうな重要地点、すなわちもつとも危険な場所を受け持つ。これを「一受け」といい、「二受け」「三受け」とつづく。全員が配置についたところを見はからって、勢子頭が猟犬を連れて山頂に登り、掛け声もろとも犬を放す。「カケる」という。

「猪は夜行性で、昼は岩や木の蔭で寝ているのを、犬が叩き起こすわけです。『ネヤ起き』といったります。連中には通りつけの道がありますから、うまくそこに待ちを張っていればチャンス到来です。十分引きつけておいて心臓を狙いますが、はじめのうちは恐怖心が先走って、なかなかうまく当らないものでしてね。とくに一発目が外れると急にこわくなってきます」

猪は猛スピードであつという間にやってくる。とくに下りが速い。山の斜面をまるで一本の棒のように突き抜け、灌木のスキ間にちらりと姿がうつる程度。その瞬間に撃つことから、相当すぐれた反射神経と射撃術を必要とする。

しかも猪は視覚は鈍いが、聴覚と嗅覚が鋭く、動くものに対してきわめて敏感である。「受け場」に待ち構えて

いる猟師は風下に位置し、匂いのするものはいっさい厳禁。タバコ、小便、頭のボマードもだめ。犬が猪を追いつ出してくれるまで三時間でも四時間でも、寒い山中の一ヶ所にじっと待っていなければならない。助けを求めることもできない。失敗はチームへ迷惑をかけることになる。孤独な自己鍛錬であり、強靱な体力と忍耐力を必要とするゆえんである。

猟犬は紀州犬を主に使っている。犬にもそれぞれクセがあって、鹿にかかるのを好む犬は兎を好むし、猪にかかる犬は狸を好む。いずれも匂いが似ているからである。よく吠える犬はがいて臆病で、真に勇敢な犬はあまり吠えない。猪のキバにかけられてケガをした場合にも二通りあって、臆病風に吹かれて廃犬になってしまうといくものとかえって闘争的にたくましくなっていくものもある。

田田さんは二十一年のとき猪猟をはじめて今年三十四年目。一猟期の最高記録四十三頭というベテランだが、その田田さんでもずいぶん危ない目にあった。命びろいしたこと何回もある。

「手負いの猪がいちばんこわいですね。ことに腹にタマを食ったやつは、どうせ助からないと観念して死ものぐるいに反撃してきます。猪突猛進で方向転換ができないといいますが、なかなかどうして、速いものですよ。前肢をぐつと踏んばって、おしりをぐるりとまわして向きを変えます」

手負いの猪に追われて、大木のまわりをぐるぐる逃げまわったこともあるし、股倉の下を猪にくぐり抜けられて冷や汗をかいたこともある。こちらが予想していた大さきさの場合はたいがい止めるが、予想よりずっと大物だった場合は、気が焦って失敗するときが多い。十歳までの四十貫くらいの大物は、さながら怪物である。

「昔の人は、猪の大きさを『何足』という呼び方で表現していましたね」

一頭分の皮で「猪ぐつ」が何足分作れるかを基準にし



猪狩りに話がはずむ、津田さん、日下さん、山田さん（左から）

た計算法で、三足取れるのはほぼ十五貫、四足で二十五貫くらい。猪ぐつは滑らない上に保温によく、昔の武士はよくこれをはいた。猪皮ではほかに手袋も作る。

交尾期は一月下旬から二月上旬、六月に出産する。子は皮膚が弱く吸血虫に襲われやすいので、母親はカリコをくわえてきて蚊帳を作り、その中で生む。交尾期のオスは飲まずくわずでメスを追いまわすため、体が消耗して味がわるい。

赤ん坊のことを「東西」（三〜四貫）といい、瓜のような縞模様がある。この縞は半年ほどで消える。秋に場所を捨てて移動する。二年目の子を「古子」（五〜六貫）三年目を「三歳」（八〜九貫）といい、四年目（十一〜十二貫）になると早熟なメスは交尾する。寿命はだいたい十四、五年。

親子連れの猪は子を中心にはさんで母親が先頭に立ち、

父親がしんがりを守る。梅雨期に出産した子は、湿気のせいかどうしても育ちにくく、弱って落伍したところを狸が狙って食べる。一匹もの（カリッポウという）は犬に追われるとすぐ山の下へ逃げる。その方が早く逃げられるからだ。子供連れは逆に逃げるに上へ向かって走る。下へおりるとこんどは山へ登るとき子供が疲れることを、母親はちゃんと計算しているのだ。

「一度おもしろいことがありましたね。私たちは弁当や衣類のはいったリユックを持っていくんですが、ある時、リユックを受け場におろして休息しているとき、いきなり猪に襲われましてね、びっくりして逃げたら猪がリユックに襲いかかって、そのまま背に負って走りだしたんです。ユーモラスな眺めでした」

源頼朝の由来で狩猟の名人といわれた仁田四郎忠常が大猪に逆乗りして刺し殺したという話があるが、まんざらあり得ないことではないのだ。

「一人前の猪撃ちになる条件は何でしょう」

「経験を積むこと、肝っ玉が太いこと、足が速いことでしょうか。昔の名人といわれた人は、病気でも山にはいるとすごい速さで走ったものですよ」

津田さんに猟を教えてくれたある老人は、受け場にあぐらをかいて岩のように微動もせずには坐り、前からやってきた猪が人間と気づかずに体をこすりつけて通り過ぎたあと、一、二米背後からゆうゆうと撃ち倒したという常人なら気を失なうところだ。むろん一発必中で、失敗は直ちに自分の死につながる、これくらい度胸のいい人が昔はざらにいた。

「一人前になるには『寝ていて星が見えるようになれば』と昔の人はいいますね。それくらい熱中し、貧乏しろということでしょうね。昔の名人は冬は猪猟、夏は川漁をして生活し、雨の日はバクチばかりしていましたよ」

昔の名人は狸についてなかなか口うるさかった。弾丸を最小限に使うこと、肉を痛めないよう急所に撃ちこむこと、ことに漢方薬として高価に売れる肝臓を撃ち潰そ



紀州犬をひきつれて猪狩りに出かける猟師たち

うものなら大目玉をくらったという。性能のわるい銃しかなかった時代には、それだけ名人芸が要求されたのだ。現在では十年間に十頭倒して一人前。

「長年猟をしていますと、ふしぎなことがたびたびありますよ。たとえば家内が妊娠しているときは、どうがんばっても獲れませんね。いくら撃っても決して当たりません。新しい生命が宿っているときに殺生するなという神の意思でしょうかね。そのくせツキがくると目くらめっぽうに撃つても当たるもんです」

ある初心者が猪にいくわして無我夢中に発砲した。銃口はとんでもない方向を向いていたのに、猪がばったりコケ（倒れ）たので、あとでふしぎに思って調べてみる

と、弾丸は方向がいの立木に当たってはねかえり、それが猪の急所に当たっていた。たいへんなまぐれ当りである。こういう銃は縁起がいいのか、いいかげんな撃ち方をしてもふしぎによく当たるといふ。

「実際、ツイているときときたら、目をつむって撃つても当たっていますね。猪の方から弾丸に当りにきてくれるような気がしますよ」

危険な仕事だからジंकスもある。弁当に酔^すのものを入れていくと猪がだめになるし、朝出発のときに子持ちの女に出会おうと縁起がよい。坊主に出会おうと午後の猪がよいという。



翌日、津田さんのチーム五人が猪撃ちに行くというので、取材班も実地観戦することにした。場所は畑市部落の裏の小高い山で、最近しきりに人家近く出没するという。猟師はお互いの誤射を防ぐために赤帽子をかぶっている。黄色がよいように素人は思うが、猪には見つかりやすい色だという。銃は水平二連銃、ウインチェスター308、津田さんの銃は以前はブローニング12口径を使っていたが、いまは豊和ライフル22口径十二連発。

七頭の猟犬は紀州犬で、勇みに勇んで地をかきむしっている。猟に連れていくのを何よりもよろこぶというから、生まれながらの猪犬である。

昨夜聞いたとおりの要領で、猟頭の津田さんが総指揮をとり、それぞれ受け場を決めて犬を放ったが、運わるくこの日とうとう猪の姿を見ることができなかった。しかし、狩猟の緊迫感はひしひしと胸に迫って、やはりこれは命がけの危険な仕事だと痛感した。近年アマチュア・ハンターが激増して数々のトラブルを起こしているが他のスポーツとは危険度においてはつきり異なるということを経験に命じておく必要がある。

なお、現在多紀郡内の猟師は二百三十人ばかりいる。うち猪専門がほぼ三十人。津田さんはむろんその中のナンバーワンである。



呉井陳蔵 みよこや

神戸店 大丸
電話 神戸 (331) 331-348
大阪店 阪神百貨店 三階
電話 大阪 (345) 9584番
姫路店 やまとやしき百貨店 四階
電話 姫路 (23) 1222番

雛 祭

名匠真多呂作きめこみ雛その他
逸品物を豊富に品揃えいたしております



おもちゃの



カメヤ

三宮方面でのお買物は……

さんちか店 ファミリータウン 391-4045

三宮店 センター街山側 331-4969

元町方面でのお買物は……

元町店 元町通3丁目山側 331-0090

パンブウ店 元町通1丁目不二家前 391-0768

古きよき花隈の星

長駒ねえさん

重森

守

え／たかはし・もう



神戸の政界、財界のおエラ方が去年の暮、オリエンタルホテルで、ある芸者の「引退祝賀会」をやった。知事や市長も感謝状を贈って、この芸者の「功績」をたたえた——なんていう、いかにも神戸らしい行事があったそうです。「芸者なんかにはバカバカしい」などと顔をしかめる向きもありましょう。当方とて、お座敷趣味なし、芸

者遊びの体験も乏しいのではありますが、主役の芸者、その名も長駒^{ちよこま}姐サンにいささか興味をそられたのも事実。なにしろ明治、大正、昭和の三代にわたって芸者生活四十七年、軍人、政治の元勳から芸能人などの遊客にはべって酒のみち、色のみち、極意をきわめ、満八十八歳で引退と決ると、現役の大物衆がパーティを催して花

道をつくってやろう、というほどの女傑ですから……。とにかく、善？は急げ、さっそくインタビュを申込み、胸おどらせて初見参と相成りました。

★いまなお「若くて酒豪」

八十八歳？ウソでしょう、といったくなるほど、長駒姐サン、さっそうとしていた。スタスタと歩き、舌いささかも乱れず、声も艶っぽい。「恍惚の人」なんてクソくらえ。

「明るいところやったら、メガネなしでも新聞読めます。耳は聞えずぎて困るくらいやし……。歯もコレ、下の方は自分の歯ですわねん」

なによりもベッピンである。長駒の名のようになった通り、やや長すぎる顔だが、それが一つの風格を形づくりに、目鼻立ちもまた明確。「そやけど、こんなにシワが……」当り前や、九十歳近くてシワがなかったら化物や

がな。

酒豪のホマレも高い。若いときは一升五合（今様にいえば二・七リットル）ぐらい、毎晩のように飲んだ。

「身体えらかったら、酒のむことにしました。二十六のとき、アル中になってしまいました。お座敷でお酌しようとしたら、手がふるえて、お銚子が盃に当たるとチョンチョンチョン（手ぶりよろしく）西園寺（公望）さんなんか、なんや、お前、アル中か、わしもやで、てな調子でした」

舞台で長唄をうたうとき、お茶の代りにグイと一杯ひっかける。そうすると「なんぼでも声が出ました」――要するに、めし代り、お茶代り、宴席でも浴びるように飲んで「どっちが客やわからん」と社長族の舌を巻かせたそうだ。

それでも、さすがに最近では衰えた。朝、昼は一滴も。「夕方五時になると、キチツと飲みとうなります。それでも、すぐに眠とうなってしまうて……」



19の春。だれも洋服をきていないころ、貸衣裳であらわれたハイカラ芸妓の長駒さん。後でお姐さんたちにウンと叱られたそうである。



常盤花壇でせいそろい。左が長駒さん

★有名人と友達つきあい

花隈の産みの親は、人も知る初代首相の伊藤博文。明治二十七年、日清戦争のあと、ここを政財界の奥座敷として活用するよう『政治的配慮』をし、自らも強く推進した。長駒姐サンは、そのころからのおつきあいである「伊藤さんはスケベやったから、たくさんご親戚をつくりはりましてなあ」ご親戚とは、つまり他人でなくあった男女のこと。起訴状でいえば『情を通じた』仲である。「みんな、私もご親戚やいわはるけど、えらいヌレギヌヤ」

庶民から見れば雲の上のエライさん、有名人とも、こんなおつきあいが多い。アル中仲間の西園寺さんをはじめ桂太郎ら明治の元勳……。軍神として知られる広瀬中佐らの軍人……。役者なら左団次、先代腐治郎……。それに大企業の社長さんは軒なみ——といった具合。そんな超大物の名前がまるで友人のようにボンボンと出てくる。

「まだ少佐時代でしたけど広瀬中佐にはごひいきにしてもらいましたネ、あの人、ええ人やけど、ごついワルサで、私らがからかうと、くくって（しばらく上げて）廊下へ放り出さしますね」

大正から昭和初期。それは花街にとっても『古き、よき時代』だったらしい。長駒姐サンがそれを語るとき、声は張りを帯び、目もキラキラと輝く。老いの練りごとではない。いま自分が、その人たちと差し向かいで盃を交しているような臨場感が口調にあふれてくる。

「片岡仁左エ門サンいうたら、私、あの人に三味線ひいてもらて、道成寺うたわせてもらたんてっせ」「皇族では、東久邇宮がようみえましたナ。えらいイキな宮さんでしてねえ」「私ネ、あるエライイ人の毛ジラミ、取ったげたことある。女の人と寝たあとの始末が悪うて、もろてきはってねエ。シラミ取るの、むつかしいんでっせ、こう（手ぶりで）掘り起すようにとらなアカン」「中井さん（元神戸市長）はオシリの大きい女の人が好きでねえ、私、そのころ、小さかった、目につけへんかったらしい」

昔の人は遊び方も心得ていた、と長駒姐さんはいう。豪放、稚氣……。家庭では、タテのものを横にもしない大企業の社長さんが、花隈ではシリからげで、ふき掃除の手伝いまでやった。津島寿一のような大物も、飲めば必ず先頭に立って踊った。「もう、あんなタイプの人、いまはおまへんな」——その辺のところが姐さんは、いささか淋しいらしい。「若いお客がふえてしてもて、粹とか、イキとかいうのわかりまへんのやろな」

修行を積み、年期を経た超ベテランの芸者をつかまえて「オイ、おばはん、ちよっと、そのタバコとってくれ」なんていわれると、内心カチンとくるのは当然かもしれない。

もっとも、この酒豪芸者、好きキライがはっきりしていて、お座敷でもキラいな客には口もきかなかった、という話だ。

「いいえ、そんなことはありません」

大まじめに答えてニヤニヤ。事情通によると、愛玩用に非ず、猛獣族に属する芸者ハンだったらしい。どんなおエラ方にもズケズケものをいったという評判——「ええ、まあ、何でも好きなこと、いわしてもらいましたア」

役所でも大会社でも、新しく転勤してきた新人（中堅幹部）の品定めを料亭でやった。もちろん審査委員は芸

者衆。

「ちよっと使えるかどうか、当てまんねんで。社長さん、えらい悪いけど、今度きた人アレあかんわ、てな工合ですわ」

長駒姐さん、こんなときは得意の毒舌でシンラツに批評したんだろうな。宴席ともなれば気がゆるんで本性を出すのは男の常。将来性の見通しについて、的中率は高かったに違いない。

こんなわけで現役の社長級もボロカス。

「Pさんはケチンボでしたナ。酒造会社の社長なら、せめて酒の粕ぐらいおくなはれな、いうたりしましてン」「Qさん、あの人は極道でした。ほんまに次から次と女こさえて……」——ああ、この録音を、部下の社員に聞かせてやりたいネ。



「引退祝賀会」に小唄「四季三番叟」で自慢のノドをきかせた長駒さん



元神戸市長の中井一夫さんもお祝いにかけつけました

★栄光と流転のなかで

この辺で、姐サンの履歴書を拝見しよう。

明治十八年、滋賀県は近江八幡の生れ。十六歳で花隈へ。「神戸はハイカラや、いうウワサで来てみたら、外人の客なんかいやへん。日本の旦那衆ばかりやった」神戸が生んだ孤高の画家故金山平三さんの父が経営する置屋「かなやま」に抱えられた。身売り金五百五十円。それから五年間、年季のあけるまでは抱え妓、二十一歳のとき旦那がついて一軒家を持たされたが、芸者の方も自前で引きつづいて出た。

「旦那いうのは、とってもむつかしい人でしたけど、

ええ人でした」

ノロケでなしに、なかなかの大人物だったらしい。だが、姐さんは生来の男好き、いろいろと浮名の方も流した。

そんな生活が十五、六年。姐サンにすれば最も充実し安定し、はなやかな時代だったらしい。

旦那が大会社の重役に昇進し、東京へ転勤することになったのがきっかけで「おかこい者ぐらし」に終止符が打たれた。大正の初め、当時の金で五万円という途方もない手切金をもらって「花隈一の大金持いわれましたわ」そのころ長駒姐サンは昔の彼氏に再会する。名前は徳三さん。初めて奉公した「かなやま」のおかあさん(女将)の連れ子だった人だ。「奉公時代に、ちょっとやりましてん」。なにをやったかはご想像にまかせるとして、その徳三サン、満州へ渡っていたのがフラリと舞戻り、十五年ぶりの再会となったのだ。

手切金の大金はある。それに相手は「高橋幸治(俳優)をもう少しよくした」好男子。「顔だけやなしに、いろいろと、どっちもよろしおましたしな」当然のように焼棒杭に火がついた。

そんなわけで芸者はキレイに廃業、二人で全国の温泉を回って歩いたりした。徳三サンは、その後も阪急岡本駅近くにある姐サンの家と本妻との間を往復する。こんな生活が十数年もつづいて金も底をついたところで徳サンがダウン、中風になったのだ。

それから半年は、つききりの看病。「どんなええ男でも病氣になったらイヤになりまっせ。アノ方も関係なしになつてしまふし……」

昭和九年、徳サン死亡。姐さんも、このときすでに五十歳。五万円の金は、タツタ四百五十円に減つてしまつていた。

あてのない東京で、二階借りのわび住まい。それを昔の旦那が聞いて「会いたくないが、毎月百円やる」

大学出の初任給が六十円の時代である。旦那は「神戸

へ帰れ」とすめたが、いまさら手ぶらで帰れない。何か芸を身につけようと、吉住小三郎（故人）のところへ通って長唄の稽古、ついに吉住小勇の名をもらうまでになった。

こうして五年、長駒姐サン、花隈に復活。こんどは芸に生きる芸者として、リバイバルの花を咲かせたと、という次第。

唄が本命。長唄から、歌沢、小唄、清元もやった。「まあ、知らんのは浪花節の三味線ぐらいのもんですな」国際会館で演じたときは、マイクなしで三階まで肉声を通った、と評判になった。

「芸事のおけいこは、きびしかったけど、ちよつとも苦になりまへんでしたナ。ハイ。けいこも舞台も一緒に気持で励んだし……」

でも、芸者やっていて、つらいこともあったんじゃないかな。「いいえ、イヤやと思うたことないですなあ、芸者いふの、よほど性（しやう）に合（あ）うてましたんやろ」

★華やかだった「いろの道」

先日引退記念パーティで、神戸製鋼所の外島会長があいさつに立ち「芸も立派だが、もう一つの方もたいしたもんでした」とぶって大笑いになった。もう一つとはもちろん「いろの道」である。

この世界という「男ぐい」なかなか剛（こう）のものと定評がある。

「そうです」ケロリとして肯定する。「ぎょうさんおましたナ」いった全部で何人ぐらい。「さあ、わかりません。五百人ぐらいおます」大まじめな表情である。では、有名人ではダレダレ……「いえまへん。軍の秘密です」宮様（皇族）とは？「おまへん。ございません」三菱の岩崎小弥太とは、もうちよつとで「ご親戚」になるころだった。「旦那持ったころで、ちよつと不自由な

ときでしたから、まあ、濡（ぬ）れただけ。ご親戚とまでは……」

舞子の避暑先へよばれたとき、朋輩と控えの間でおしやべりをしていた。客の名前を順番にあげ、「あの人はご親戚、この人は、まだ兄妹……」その話を、フスマ越しに盗み聞きしたある銀行頭取が、宴席で「いまから勧進帳よみます」と前置きして、全部スッパ抜いた。

「あんな恥づかしかったこと、おまへんな。そういうことは内緒にしとくもんでしやる。あんなおおっぱりにいわれたら、すわってられしまへんがな」

どんな男性がお好みのタイプ？「やつぱり、顔の輪郭。昔は、めんくいでしたナ」。

いま八十八歳。それでもなお、アノ道は現役に違いない、という説がある。「どういたしまして。第一、もうカオのええの、おまへん」へえ、えらいすんまへん。

花隈は、さびれてきたと人はいふ。芸者衆も、昔の一割足らずの四十人。それも若手は六、七人しかいない。全盛期には、一人の芸者が四、五十人の男衆を従えて表通りを歩いた、などという話は、もう伝説に近い。

だが、ここに生き、ここで幕を閉じた長駒姐サンの「栄光の軌跡」は消えない。十二月二十日、八十八歳の誕生日を迎えた日に、ヒヨドリ越に姐サンの墓が立つた。

「宴会（引退パーティ）してもろて、墓もつくつてもろて、もう思い残すことおまへん。いいたいこというて好きなこととして、ねえさんほどトクな人はないって、みんないうてくれます」

淡々と、自分を振り返る口調は乾いていた。悔いのない女の一代記――。

「私、死んだら、カネなんか叩いていらん。にぎやかに三味線ならして、みなさんに酒のんでもろて、いっぱいごちそうしや、いうてますねん」

長い長い顔が、さわやかに笑った。

MOZART

珈琲

古い
洒落た音楽を楽しみ乍ら極めて良質の生豆を煎りあげ淹れた珈琲を飲む旨さは格別のもです。



松材を用いた造作の中で、

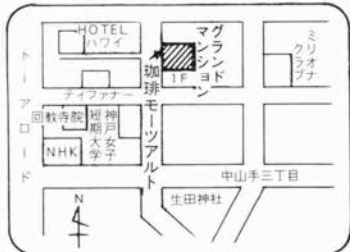
な雰囲気のお店。

それぞれ参百八十円で
召し上がって頂く優雅

フレッシュジュースなど、

トアロードの坂をのぼって回教寺院を東へ初めての
四ツ角を北へのぼるグランドマンション一階に、珈
琲・紅
茶・グレープジュース・アイスクリーム

神戸市生田区山本通 丁目
九八グランドマンション 1F
電話 二四一―三九六一
午前十一時〜午後十二時



長い旅路から帰った旅人の家



- 我家のお知らせ
オーディオルーム
＜PM8:00 より＞
月曜日 小山乃里子
＜ノコチャン＞
金曜日 三浦 絃朗
＜ミウラサン＞
その他の曜日は外人アナ
ウンサーのD.J

☎ 331-5664

居酒屋風 **井戸のある家**
れすとらん

Tea time a.m.10:30-4:00

れすとらん p.m.4:00-a.m.2:00



アン・ドウトワの
物語の始まり……

UN DEUX TROIS
café et restaurant
UN DEUX TROIS

☎ 391-8639

営業時間/p.m.5:00-a.m.2:00



きものと細貨

おんがら庵

神戸

西店/三宮センター街・電話 331-8836(代)

東店/三宮センター街・電話 331-0629

三宮店/さんちかタウン・電話 391-4303

東京

銀座コア店/4階着物コア・電話573-5298(代)

渋谷東急店/5階和装名家街・電話462-3409(直)

日本橋東急店/4階和装名家街・電話211-0511(代)
(内線294)

池袋バルコ店/4階着物小路・電話987-0561(直)

刀 剣

日本民族の象徴である美術刀剣武具甲冑を豊富
に揃え皆様のご来店をお待ちしております。



鑑定 買入

研 白鞘 拵 御承処

神戸市生田区元町通6丁目25番地

刀
古
骨

剣
術
董

元町美術

〒650

TEL078-351-0081

★神戸の集いから

□ なごやかに新春国際

親善パーティ開く

市長主催の恒例の「神戸国際親善カクテルパーティ」が十二日、午後六時から相楽園会館で開かれた。各国領事夫妻や外人代表者等三百五十名が出席、はなやかな民族衣装の女性も交わって和やかな雰囲気のパティ。宮崎市長は「昨年は非常に国際的な交流を多く持ち、神戸のために努力した。今後とも神戸を住みよい町にするために、環境のよい町、福祉のある町、文化都市、神戸といった町づくりを目指します」と挨拶。外人代表は、W・ガリンスキー西独総領事が挨拶。一谷県副知事、光田神戸新聞社長、作家の陳舜臣夫妻など多彩な顔ぶれだった。



なごやかな親善パーティ風景

□ チュー太郎とマカンブツサールのクリスマスパーティ

「四十九才の抵抗」と頑張っている子年生れの男子諸公の「チュー太郎の会」メンバーと、独身で頑張っている女性のたべる会「マカンブツサール」メンバーの共催で、十二月二十日北野町のルカ・カルトンへ約百名が集まって愉快なクリスマスパーティが開かれた。チュー太郎の会は、中西勝、市野弘之、大久保文男、竹田洋太郎、永田良一郎、占部六郎、小泉正己さんたちが出席、発会式を太鼓を叩いて行ない、マカンブツサールレディス十二名は花やかに装ってクリスマスパーティに興をそえた。他に松井高男さん、八尋不二さん、細川董夫妻なども参加。



華やかなクリスマスパーティ

Chianti corner

● キャンティ・コーナー



酒は友 肴は話

キャンティは心のよりどころ

近藤国夫

〈白水登喜酒・神戸JTC広報委員〉

「キャンティの榊さんには、ぼくがアメリカへ行くときに、大変お世話になりました。だから飲むだけでなく、先輩として尊敬しますよ。このバーに腰かけると調子がでてる(笑) ぼくが飲むときいつもこの言葉が浮かんでね。酒は友、肴は話、酌美人、決して出ずな猫とくそ」 どうです?!



洋酒の店 キャンティ

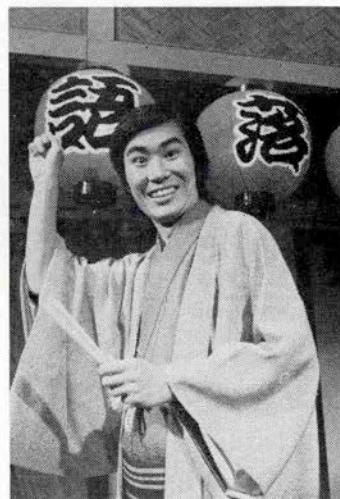
Chianti*

榊 晴夫

神戸・生田区北長狭通二二三

TEL A 391 V 3 0 6 0

★と一く・さろん〈2〉



上方落語大全集舞台にて

上方落語 とともに

桂 三 枝
〈落語家〉 司会者



同舞台で望月美佐さんと

今や落語ブーム。神戸の柳原には、『^{どめ}百笑会』というミニ寄席も誕生している。『上方落語大全集』。一時間落語のサンテレビワイド番組。西内隆演出、桂三枝、望月美佐の司会でお客さんに舞台装置よろしく本格派の上方古典落語を聞かせ、受けに受けている。その司会で笑いを誘い、上方落語の普及に力を入れている桂三枝さんにインタビューしてみた。

「この番組が始まったのは去年の十月からですが、今では招待客五十名、その他飛び入りのお客さんを含めて八十名ぐらいの人が聞きにきてくれます。出演者は上方落語家の人だけで、すべて落語一色で統一し、皆さんに上方落語の本来の味を再認識してもらって、気楽に面白く落語に親しんでもらいたいと思っています。一般人の持っている古典落語に対する古くさいとか年寄りくさいといった拒絶反応を取り除いて、じっくり聞く面白さを感じてもらえるような、いわば入門書のごとき役割を果たせればと思っています。もともと、落語というのは庶民に根ざした笑芸なんですから気さくな番組にしたいんです。ぼくはずっと大阪ですが、大学在学中に師匠に弟子入りしたんです。高校の時、演劇部に所属していて、将来は花登籠のような劇作家になりたいナアと思って、書いてもみたのですが、書くより演じる方が早いと思ってやっているうちに、米朝師匠などに会って落語に興味を持ちました。でも、運がよかったですね。」

テレビやラジオにも苦勞なく出演させてもらって。

現在、松鶴、米朝、春団治、小文枝の四人の師匠が柱になり、この四つの輪で上方落語は前進し、各々の素晴らしい持ち味が多くの弟子を従えて、花開いているわけです。私たちがヤングタウンというラジオ番組を始めた頃には、そういう落語界でのジャンルは初めてで、どのようにすればいいという手本がなかったんです。無我夢中でしたナア。結局、新しいジャンルができあがった。その反動で、古典落語が再び出現してきたともいえますね。しかし、僕たち上方落語家は、古典落語という芸能の継承者なんです。二鶴さんともいうてゐるんですが、われわれは上方落語の宣伝部員なんです。私自身、司会が司会で別として、桂三枝自身は古典落語がすべてです。師匠に教わった落語を自分なりにくだいて、弟子ができることを教えるんです。落語というのは、元来、本というものがなくて語部の形式を取る代表的なものですから。最近ブームにのって落語の本がかなり出回っていますが、それでも、上方落語の本は少なく、この間、米朝さんが『米朝落語撰』というのを出されたくらいですね。

神戸はええ街です。今は、この番組のある時しか神戸にはきませんが、上方落語の本来の味を知ってもらいために頑張ってサンTVに通ってきます。上方落語は、関西の人でないといけませんもんです」

ご存知ですか

神戸に歌ごえスナックができたことを…
スーベニールで見知らぬ友達と声を合せて
歌うよろこびを味わってください！



■パブリックサバー

スーベニール

神戸市生田区北野町六甲荘下
りーハイムマンション1F ☎221-8611
営業時間 平日 午後4時～午前2時
土曜 午後3時～午前2時
日曜・祭日 午後2時～12時

■ 12月の リクエストベストテン

若者達
ともしび
トロイカ
愛の賛歌
おさななじみ
学生時代
一週間
サントワマミー
雪が降る
母さんの歌

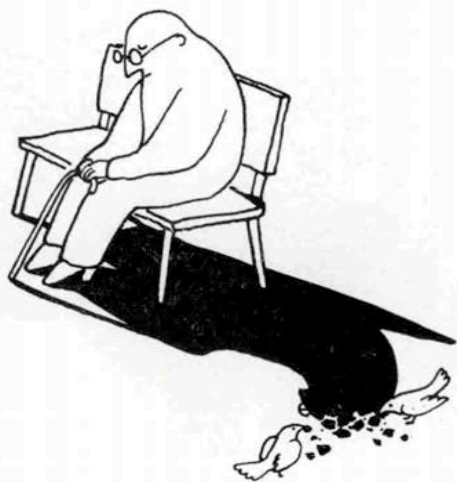
■ メニュー

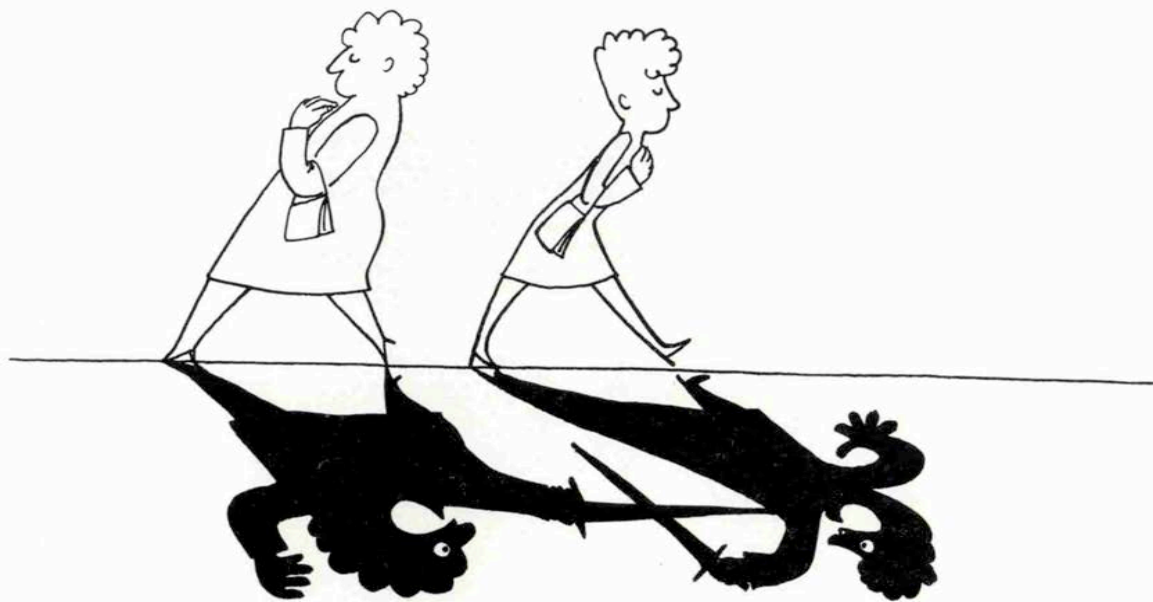
ビール	¥250
水割	¥300
フィズ	¥300
カクテル	¥400
ピザ	¥400

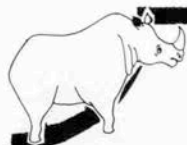
パトマム・ジョーズ

2

影★岡田 淳





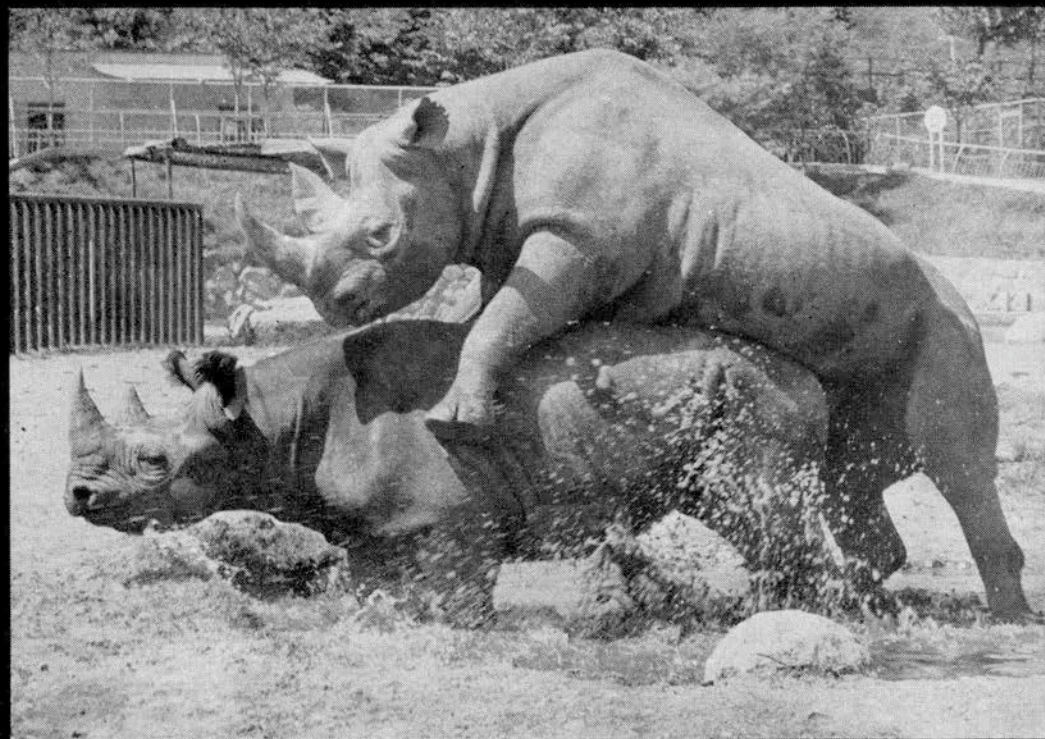


動物園飼育日記 — 81 — 亀井一成



ないしょ話シリーズ<2>

サイのお産



サイを誕生させたのは神戸王子動物園が日本で最初、しかも三頭の子サイを育てることに成功している。(昨年二月大阪で四番目が生まれた)

世界の動物園でもサイの出産例がゾウに次いで少ないのは、エサよりむしろ「つれあい」にうるさいという堅物なところがあるからで、よく似合いの番だ(つがい)と同居させても野生での孤独と排他性をむきだしにしてなかなか折合わないことが多い。いったん激怒すると異性であろうと死ぬまで闘うのである。

そんな訳でわれわれは隣りあわせの別室にオスとメスを長いあいだ離した。つまり寝息はすれど姿が見えないというやり方だ。いや彼らにはすまなかったけれども、そうさせたおかげで、オスとメスとの気心を読みとることもできたし、およそ二十三日という性周期で、発情が現われることもわかった。そこで、その発情期にすかさずオス、メスを同居させたのである。



●子サイから離れじっと見守る親サイ

メスサイの初めての発情は六歳。しかも、その発情が不充分なときにはオスを全く寄せつけないこともわかったが、交尾の体位はやはり「馬型」であった。まずコトをはじめるにあたっては顔のあたりに鼻をすり寄せ触れあうオスが次第に横腹や下腹を角で押しつけると思えば、互いの小水のニオイを嗅ぎあったりして

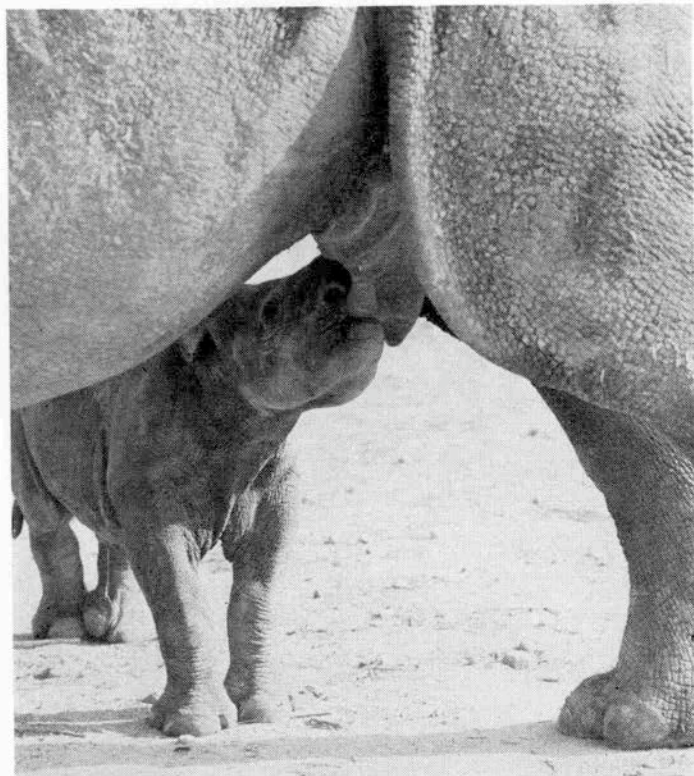
は走り、さらにカチンと角をつき合せるという激しいあそびが続いた。しかし、そうした折り、はたとメスが立ち止まりはじめた。しかも巻きこんでいた尾をピンと上げていた。つまりこれがオスを許すサインだった。

交尾の頻度は一日平均三〜四回しかも一回の所要時間はゾウやカバと比べものにならないほど長く、最短で二十九分。最長実に一時間二十分とおどろくほど長いものだった。しかし、約五日間こうした儀式的の終わったあと、翌日からは、あれほど仲むつまじかったメスが、もうオスを顧として寄せつけないようになったのである。

クロサイの妊娠期間は十五、五カ月。つまり交尾後およそ一年四カ月で日本では初めてというサイのお産をみるようになった。シカやウシの仲間は、ふつうすわってお産をするが、キリン、ゾウ、サイなど大動物が意外にたつたまま、かなりの高さから子を生み落とす。しかも娩出しはじめた子をぶら下げたまま、陣痛とあたりに警戒して動き回り、娩出の寸前までどこに産み落されるかわからない。だからお産が近づくと、稲わらを敷きつめた部屋に閉じこめておかないと運動場の土の上や水たまりに産んでしまい、せつかくの子を死なせてしまうことさえある。

腰の高さ二メートルもあるキリンなど勢よく産み落とされるお産にははらはらさせられるが、事実ゾウやキリンなどドサツノとかなり大きな音がある。生まれた直後の子はまだ息をしていない。耳やヒフにケイレンが起これりその数秒あと早い腹式呼吸がはじまる。やはり頭から生まれるのが正常だが、そのときうすい羊膜がやぶれていないと、呼吸がはじまらないまま、その子獣は助からない。母体内ではこのうすい羊膜のふくろに包まれて育っていたわけだから、生まれた子からだにはこの羊膜や羊水の汚れがくっついていて、それを親はなめてたべてしまうが、そのときこそが、親子はじめての触れあいであって、ふかい親子の絆が生れるのである。

ところでライオンやトラなどの赤ん坊は目も見えず三



●子サイはメス親の次の出産が近づくまで2年近くも乳をのむのです

とに敏しょうに動く。

そのようなとき、ハナすじにある、あの、大きな角がじやまして足元が見えにくい。

あやまって子サイを踏みつける心配さえある。

サイのメス親はそれを心得ていてわざと子サイから離れ、じつと、しかも横むきに生まれたばかりの子サイを見守っていたのである。

しかし、四肢が強まり、子サイが歩きだすと、がらりと親の態度が変わった。これまでとは逆に動く子サイのそばから全く離れなくなってしまうのだ。

子サイはおよそ二カ月で青草を食べはじめが、次の出産が近づくまで二年近くも乳をのみ、野生でもサイはゾウやカバのように群をつくらないので二、三頭つれだつて見かけるのは母と子サイの兄弟づれで、オスサイはいつも離れて生活している。(クロサイはアフリカ産、一産一仔で五、六年で性的に成熟する。)

〈王子動物園学芸員／写真も〉

カ月はしないと親について走ることができない。それと対象的にキバをもたない草食動物は、生後わずか二十、三十分もすると歩くことができるし、四、五時間もするとシマウマやキリンなど親の後を追って走ることさえできる。まさに野生への適応だといえる。

ところが、サイのお産を見てすっかりあわてた。歩きながら生み落とした子サイに親はなぜか近よらない。子サイをちよつと嗅ぐだけ。あとはまた離れてしまう。

まるで知らん顔が続いた。これは母性に欠けている。このまま見殺しにするのではと、あせったが、とんでもないあやまりだった。

毛のないサイのからだは、あまりなめる必要もなく、すぐ乾く。そのうえ、いざとなればあの巨体でも、まこ

☆

☆

☆

☆

☆

☆

第一回
神戸っ子のCOVER-GIRLにご応募ください
カバー・ガール



カット／石阪春生

神戸センスあふれる
明るい神戸っ子 月刊神戸っ子の
COVER-GIRLに応募ください。
神戸っ子の誌上やお祭り、催し
に活躍していただきます。

資格 神戸在住の未婚女性
身長 155cm以上
年齢 17才～25才
履歴書、写真を編集部
までお送りください。
締切 3月5日